

軍事上の通報に關する所無かつたことである。この軍情緊急の事の爲に使を差するに當つては、次節に述べる海青站を利用して專使を差したのであつて、兩者の職能は截然としてこゝに區別されて居つたことを知らねばならぬ。

さてこの急遞鋪と稱するものは如何なる組織によつて成つて居つたか。即ちこの遞鋪は如何なる道筋に如何に配置せられたか、換言すれば站の置かれた道路とは如何なる關係に在つたか、鋪兵は如何にして徵集されたか、遞傳は如何なる方法によつて行はれたか等について、大概の有様を攻究して見よう。

先づその道筋について考へて見ると、前に引いた元史兵志急遞鋪篇に、燕京・開平・京兆の間に、地里の遠近人數の多寡を驗して急遞站鋪を立て、「每十里或十五里、二十五里、則設一鋪」と記して居る。かゝる各鋪間の距離の不等は勿論各道筋の地勢住居等の條件に基づいたのに相違ないが、この道筋は特に急遞鋪の爲に設けられたものであるか、それとも驛站の設置せられてある道筋と同一であつたか、この疑問に對する適切な解釋はマルコ・ポロや其他西方旅行家の記事について求めることが出来る。即ちマルコ・ポロの言ふ所によると、

Cambaluc (即ち大都) の町からそれぞれ各省に向ふ道路が開けて居る。……皇帝の使者は Cambaluc からどの道

路を進むにしても、各二十五哩を行くごとに馬站即ち yamb といふ驛に遭遇する。……これ等の驛站の間各三哩毎に、皇帝の旨によつて設けられた小堡があつて、その周圍に人家約四十戸があり、皇帝の飛脚 (Foot runners) を勤める人々がこゝに住んで居る。(Yule, Travels of Marco Polo, I 433-435)

と述べてゐる。こゝにいふ yamb 即ち站と站との間三哩毎に設けられた小堡といふのが即ち急遞鋪に相當し、そ